

地中海地域におけるトランスナショナリティに関する人文学的研究

1. 当初掲げていた目的

宗教間の摩擦・対立（コンフリクト）が顕在化する今日、宗教復興として総称されるさまざまな宗教現象の動向及びその内実を把握することは、重要かつ緊急の課題となっている。本研究では、グローバルに展開する宗教復興のうち、地中海という地理的な限定を設けた上で、その特質に関する詳細な比較検討を行う。そして、そのことを通じて、宗教間のコンフリクトの軽減や回避のために必要な課題領域を明らかにし、具体的な方策の提言を行うことを目的とする。

本研究はまた、

- （１）一国や一宗教に関する個別情報の集積から、地中海両岸に緩やかに共有された信仰知を明らかにすることを目指しており、その意味で
- （２）1960 年代に一端は標榜されながら、その後ヨーロッパ人類学やイスラームの人類学の名に分岐していった「地中海人類学」の可能性を再び探ることを目的としている。また、
- （３）地中海両岸という国家の枠組みを超えた複数領域を対象域に設定することにより、トランスナショナリティやトランス・ローカルを焦点化した人文学的研究の確立を目指す。

2. 研究会の開催状況（平成 20 年度）

年度始めに立てた予定通り、年 4 回開催した。

2008 年 7 月 5 日 第 1 回共同研究会

2008 年 10 月 12 日 第 2 回共同研究会

2008 年 12 月 14 日 第 3 回共同研究会

2009 年 3 月 2, 3 日（1 泊 2 日） 第 4 回共同研究会

3. 研究会の内容

第 1 回 初顔合わせ・自己紹介・二つの研究発表

赤尾光春「ディアスポラの聖地：ウクライナで復活したユダヤ人巡礼から見えてくるもの」
安田慎「現代シリア派参詣とトランスナショナリティ：現代シリア・シリア派参詣地成立に関する一考察」

第 2 回 共同研究者による研究発表

藤原久仁子「トランスナショナリティに関する人文学的研究に向けて」
「変奏される伝説、転置するフェティッシュ：ゴゾ島南西部にある歴史民俗博物館の井戸をめぐる」
久野聖子「ヨーロッパのロマのナショナルな愛着について」

鷹木恵子「アルジェリア・アラウィー教団のエキュメニカルな思想運動とトランスナショナルリティ」

石原美奈子「エチオピア聖地ファラカサにみる異教共存の論理」

出口雅敏「フランス民衆文化”の行方?—民衆伝統芸術博物館 (MATP) からヨーロッパ地中海文明博物館 (MuCEM) へ」

竹中宏子「サンティアゴ巡礼に関する研究」

<以上 2 回の研究会における議論から>

- ・トランスナショナルといえどもトランスナショナル。地中海という枠で区切ってそれでは何が新しく言えるのか。その特質を明らかにすることに意義があるか？
- ・トランスナショナルリティというとき、ナショナルを前提に論じるのか？
- ・比較研究をしたとして、そこから何が見えてくるかが大事。多様性だけではいけない。
- ・コンフリクトの解決や回避の糸口になるような何かが見えるとか、異なる他者との共生の在り方の提示であるとか、何か全体の議論から共通して主張できる提言のようなものが見えてくるとよいが、全体構想がまだよく見えない。
- ・何らかの提言をすることを目的とするなら、むしろ「地中海」や「トランスナショナルリティ」に拘る必要がなくなるのではないか。
- ・21 世紀 COE におけるトランスナショナルリティ研究の蓄積を踏まえる必要があるのではないか？

第 3 回 一つの研究発表・藤原による 21 世紀 COE の成果レビュー

工藤晶人「アルジェリア入植者社会史と地域・ナショナルリティ」

藤原久仁子「トランスナショナルリティ研究における論点：21 世紀 COE の成果から」

<レビューをして見えてきたこと>

- ・工藤さんの発表は「上からのトランスナショナリズム」として捉えることができるだろう。Transnationalism from below, above, in-between に注意しながら、自分がどこのレベルで論じているのかを意識する必要がある（その上でその他との接合をどう図るか）。
- ・信仰と儀礼/アイデンティティとトランスナショナルな実践の相似：アイデンティティ研究に対する見直し（特に陳論文）
- ・差異が排除の論理ではなく再編成の導引として働く可能性：トランスナショナルな場におけるさまざまな差異は集団間の敵対関係やコンフリクトを生み出す、それゆえそれをいかに解決したり軽減したりできるか、という視点だけでなく、差異を調整することによって場が再編成される、差異は他者に対する共鳴や提携関係を生み出す、という視点からの研究も可能（特に木村論文）
- ・（植村論文）「分析概念としての<ローカリティ>の再構築とその民族誌的記述に必要なのは、この概念が含む多義性やズレを解消することではない。むしろ、ナショナルな市民を創出するために国民国家が設定する『ローカリティ』に対して、この概念の解釈の多義性を利用して、人々が近隣の日常生活空間において、その一義的な理念を共有しているようにみえながらも、そのような創出の技法を弱体化する可能性のある空間を保持し続けていることを明らかにすることにある」（p.197）：移民というナショナルレベルでの一時性と、ローカルレベルでの一時性

としての「立ち寄り」(p.209)への注目

- ・限られた状況のなかでよりよい生を確保するためにどのような生存戦略を練っているか、という（暗めの）分析ではなく、橋渡し、架け橋、他者と他者とのコネクターという（明るめの）移民分析の可能性（特に陳論文、ヒペイロ論文）

<レビュー後に出された意見>

- ・上からのトランスナショナリズムにせよ、下からのトランスナショナリズムにせよ、権力との不均衡な関係性に注目する必要があるだろう。
- ・トランスナショナリズムは物理的なレベルでも、象徴的な次元でも起こり得るし、現実の場でも仮想の場でも起こり得る。
- ・地中海連合が 2008 年 7 月に発足するなど、地中海地域に変化が訪れているなかで、現実社会に生きる人々に向けてどのようなメッセージを送ろうとするのか、現実社会におけるこの研究会の位置づけを考えていく必要がある。
- ・フィールドワークに基づき現実社会で何が起きているか、という **what** を書いて地域的な比較や広がりを検討するのではなく、要因、すなわち **why** を見ていく必要がある。
- ・フィールドワークを主たる方法としながらも歴史的な枠組みへの注目が重要になってくるだろう。
- ・トランスナショナリティに関する基本的な文献を押さえ、われわれの間にある程度共有された了解事項を築く必要があるのではないかと。

第 4 回 3 冊の文献のレビュー+今後に向けた話し合い

Smith, M. P. & Guarnizo, L. E. (eds.)

Transnationalism from Below, New Brunswick and London: Transaction Publishers, 1998

Hannerz, U.

Transnational Connections, London and New York: Routledge, 1996

アパデュライ, A. (門田健一訳)

『さまよえる近代：グローバル化の文化研究』、平凡社、1996（2004）年

<レビュー後の話し合いにおいて出された意見>

- ・トランスナショナルな状況のなか、メディアの果たす役割が増している。これまで人々の移動ばかりがトランスナショナリズム研究では注目されてきたが、移動しなくても移動しているかのような機能を果たすメディアの役割に焦点を当てた研究にするのもひとつではないか。
- ・リアルとリアルでないものの区別をどう個々人が切り分け切り結んでいるか、その状況を見ていく必要があるだろう。
- ・人間は非合理的な側面と合理的な側面の両方を併せ持つ。これをあわせてどう全体を描けるかが課題になるのではないかと。
- ・トランスナショナリズム研究でこれまでなされてきたことを批判するという方向は取りづらい（言われてきたことはもっともで納得する）。すると、たとえば移民から巡礼や聖者崇敬に分析対象を変えることで見えてくる視点の提示であるとか、この部分に新たな光を当てることが

できた、というかたちの報告になる。それではつまらない。重箱の隅をつついたら何かでできましたとはいけない。

- ・何を問題化したら何を語ったことになるのか。それを考えてみる必要がある。

→我々共同研究における論点、切り口は何か

- ・コンフリクト
- ・それとは反対に居心地のよさ、居場所の獲得
- ・anti-transnationalism (ナショナルなものを求めたトランスナショナルな動き)
- ・リアル・ヴァーチャリティ
- ・歴史性 (変容)

→論文集を出す際には

- ・ローカル/グローバル、ナショナル/トランスナショナルなど二項対立的なモノの見方に対して、より複雑な現実の在り方を示す (clear cut な border のない、融合、溶解した様子を示す)
- ・トランスナショナルな場で生じているさまざまな矛盾、非合理性を描くことを通じて、コンフリクトに対するさまざまな対処の在り方、状況転換の在り方、調整の在り方を示す
- ・分析をする際には予定調和的にならないようにする。いくつかのキーワードで結びつきながらある方向性が全体で示せるような論文集が出せるといいが、キーワードを散りばめただけのような印象を与えないものにする。

4. 今年度の計画

研究会を2回開催 (夏までに1回・年度末に1回)

論文集の刊行 (『コンフリクトの人文学』の特集/特集号、日本語/英語)

論文集企画の趣旨: 場所論再考型/具体的な方策提言型

cf. オーストラリアの「写し霊場」